



J-NEXUS 四季報（第3刊号）

2026 年 8 月

在ボストン日本国総領事館

目次

1. Innovation Spotlight: Japan 特集

- ・「Innovation Spotlight: Japan」開催報告（ボストン科学博物館 Tim Ritchie 館長） P1
- ・大阪大学免疫学フロンティア研究センター（IFReC）（坂口志文 特別荣誉教授） P2
- ・「科学が人生を変えた場所」で、次の世代へ科学を届ける
（ハーバード・メディカルスクール 内田舞准教授） P3
- ・日米宇宙協力：ISS からアルテミスへ
（宇宙航空研究開発機構（JAXA）ワシントン駐在員事務所 土屋健太所長代理） P5
- ・Building bridges（公衆衛生の視点を通じたのイノベーション）
（ハーバード大学 T.H. Chan 公衆衛生大学院 武見国際保健プログラム：主任教授 後藤 あや、
2025-26 年度武見フェロー アミール 偉（いさむ）、バーンズ デイビッド アトメニー） P6

2. ニューイングランド経済・イノベーション・エコシステム概観

- ・なぜボストンか、なぜ今か：共創による三菱電機の DX 推進
（Mitsubishi Electric Research Laboratories (MERL) Anthony Vetro 社長兼 CEO） P8
- ・日本の大学エコシステムをボストンへ接続する：NINEJP ボストン拠点の挑戦と共創
（広島大学 田原栄俊副学長（スタートアップエコシステム担当） P11
- ・世界の誰もが来たくなる大学へ～UTokyo College of Design の創設
（東京大学 藤井輝夫総長） P13
- ・ENSEMBLExJ ～世界のイノベーションを日本の患者さんへ～
（国立がん研究センター） P16
- ・出会いを問いに、イノベーションを価値に
（ハーバード・ビジネス・スクール 天野友道 准教授（経営学）） P19
- ・Building a Two-Way Innovation Bridge Between Japan and the United States
（Alumni Ventures） P21

3. 研究開発・イノベーション動向

- ・Yale の日本人生命科学研究者をつなぐ Y-JLS Forum
（Neurology, Yale School of Medicine 住田智一） P23

4. その他・イベント紹介

- ・ニューイングランドの日本人科学技術研究者情報（PI リスト） P25
- ・今後のイベント紹介 P26

1. Innovation Spotlight: Japan 特集

□ ボストン科学博物館 (MOS) のご紹介と「Innovation Spotlight: Japan」開催報告 (ボストン科学博物館 Tim Ritchie 館長)

ボストン科学博物館は、2026 年 5 月 31 日、第 1 回となる「Innovation Spotlight: Japan」を開催いたしました。本イベントは、私たちの未来を形成する科学、研究、技術に焦点を当て、当館の総力を挙げて一日にわたり実施したものです。単なるイノベーションの紹介にとどまらず、国際的なパートナーシップの力、そして世界が直面する課題と機会に応える科学的成果の意義を示す一日となりました。



科学技術が私たちの生活のあらゆる側面を形成する中、ボストン科学博物館は、全ての人々が地球規模の課題解決のために科学を活用できるよう、その力と意欲を育む取組を進めています。私たちのミッションは、科学を学ぶ喜びを生涯に渡って持ち続けられるよう、人々に働きかけることです。そして、私たちが描くビジョンは、科学が一人ひとりのものとなり、それが社会全体の利益につながる世界を築くことです。

「Innovation Spotlight: Japan」は、宇宙探査や人工知能から、持続可能なエネルギー、先端材料に至るまで、幅広い分野において科学外交の力を示すものとなりました。当館及び在ボストン日本国総領事館のパートナーの皆様をお迎えできましたことを大変嬉しく思います。ご参加いただいたのは、宇宙航空研究開発機構 (JAXA)、新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO)、日本医療研究開発機構 (AMED)、ハーバード大学 T.H.チャン公衆衛生大学院 武見国際保健プログラム、ハーバード大学アーノルド植物園、MIT メディアラボ、MIT Kagome Lattice、UConn、キヤノン、フジクラ、NTT、日本航空、東レ、IVS / Kyoto、3D Architech、Binnovative、OrigamiMIT の皆様です。

来場者は、琉球國祭り太鼓による活気あふれる演舞をお楽しみいただいたほか、2026 Japan Prize (日本国際賞) を受賞したシンシア・ドワーク博士 (ハーバード大学コンピューターサイエンス学科教授) による基調講演「There's Science for That! AI, Responsibility, and Choice」に耳を傾けました。また、当日は二つの「Meet the Scientist」セッションも実施されました。一つは、JAXA ワシントン事務所の土屋健太所長代理によるもので、アルテミス計画をはじめとする主要な宇宙開発における日米協力について語られました。もう一つは、ハーバード・メディカルスクールの内田舞准教授と、ハーバード大学 CBS-NTT 知性物理学プログラムの田中秀宣博士によるもので、脳科学と人工知能の交わる領域について探究するものでした。

高橋誠一郎総領事および在ボストン日本国総領事館の皆様には、連携と相互の学びの機会をいただき、また本イベントの実現にご尽力いただきましたことに、心より感謝申し上げます。私たちは共に、今日の成果を祝うだけでなく、明日のブレークスルーを生み出す原動力となる関係性、探究心、そして協働の精神を分かち合いました。科学は国境を越えるものであり、私たちの未来は共に築かれていくのです。

□ 大阪大学免疫学フロンティア研究センター（IFReC）（坂口志文 特別荣誉教授）

2026 年 5 月、ボストン科学博物館において「Innovation Spotlight: Japan」が開催されました。本イベントは、日本の科学技術とイノベーションに焦点を当てたものであり、私もこの機会にビデオメッセージをお寄せできたことを光栄に思います。

現在、日本では基礎研究の成果を実用化へとつなげるためのさまざまな取り組みが進められています。一方で、今日私たちが直面する課題の多くは地球規模のものであり、その解決には学問分野や国境を越えた連携が不可欠です。また、その進展は科学と社会との信頼関係によって支えられています。



私たち IFReC では、免疫システムを根本的なレベルから理解することに取り組むとともに、その知見を活用して、さまざまな免疫疾患やがんに対する新たな診断法・治療法の開発を進めています。

その中で私自身は、制御性 T 細胞（regulatory T cells）の研究に取り組んでいます。制御性 T 細胞は、自己免疫疾患やアレルギーなどの異常、過剰な免疫応答を抑制する働きを担うリンパ球集団です。

このような研究を支えているのが、大阪大学における長い免疫学研究の伝統です。大阪大学には 100 年近くにわたる免疫学研究の歴史があり、その基盤は長年にわたる基礎研究、臨床実践、そして科学者や医師の育成によって築かれてきました。

こうした背景から、私は「Innovation Spotlight: Japan」のような機会を大変意義深いものと考えています。本イベントは、研究者、教育関係者、産業界のリーダー、学生、そして一般市民が集い、それぞれの視点を共有し、新たなつながりを築く場となりました。

このイベントを通じて生まれた対話が、今後も活発な議論を促し、新たな協力関係を育み、さらに若い世代が科学とイノベーションの社会への貢献について考えるきっかけとなることを願っています。

□ 「科学が人生を変えた場所」で、次の世代へ科学を届ける（ハーバード・メディカルスクール 内田舞准教授）

先日、在ボストン日本国総領事館及びボストン科学博物館の主催により、ボストンの Museum of Science で講演をさせていただく機会をいただきました。また現在は、「感情を生み出し調整する脳の仕組み」をテーマにした新しい展示の企画にも協力させていただいています。

実は、この Museum of Science は、私にとって特別な場所です。

高校生の頃、私は日本からマサチューセッツ州のスミス大学が主催する高校生向け夏期科学プログラムに参加し、その課外学習で初めてこの博物館を訪れました。当時、科学の面白さに夢中だった私は、この場所で「科学とともに生きていきたい」「医学の道に進みたい」という思いを強く心に刻みました。

それから約 30 年。

今度は海外から訪れた高校生ではなく、ボストンで研究者・精神科医として働く立場でこの場所に戻り、自分の人生を変えてくれた博物館で、脳科学やメンタルヘルスの魅力を次の世代に伝えるお手伝いができることに、大きな喜びを感じています。

今回の講演では、「脳はどのように感情を生み出し、私たちの行動を決めているのか」というテーマを中心にお話ししました。

人間の脳は、狩猟採集時代から基本的な構造がほとんど変わっておらず、感情は「危険か安全か」を瞬時に判断し、生き延びるための行動を促すよう進化してきました。しかし現代社会では、命に関わる危険よりも、人間関係や将来への不安など、正解のない状況に向き合うことが圧倒的に多くなっています。そのため、脳の短期的な生存戦略が、必ずしも長期的な幸福につながらないことがあります。

だからこそ、自分の感情を抑え込むのではなく、「私は今、何を感じているのだろう」「なぜそう感じているのだろう」と立ち止まって考えることが、より良い選択につながることをお伝えしました。

さらに、脳は繰り返し経験する情報から神経回路を作るため、社会の中で繰り返される偏見やステレオタイプも、知らないうちに脳内に「当たり前」として定着してしまいます。性別や人種、精神疾患に対する偏見だけでなく、自分自身に対する思い込みも同じです。しかし、脳には「可塑性」があります。意識的に立ち止まり、自分の考えを問い直すことで、神経回路は変化し続けることができます。

私は COVID-19 ワクチンの普及活動にも携わってきましたが、その経験を通して、科学的根拠よりも誤情報や偽情報のほうが速く広がり、人々の健康や意思決定に深刻な影響を及ぼすことを目の当たり



にしました。だからこそ、研究によって科学を前に進めることと、その成果を社会へわかりやすく伝えることは、どちらも同じくらい重要な使命だと考えています。

高校生だった私の人生を変えてくれた **Museum of Science** で、今度は私自身が科学を伝える側として戻ってこられたこと。そして未来の子どもたちが、自分の可能性を見つけるきっかけづくりに少しでも貢献できることは、研究者としてこれ以上ない喜びです。

あの頃と変わらず、私は今も科学が大好きです。そして、科学には、人の人生を変える力があると信じています。

□ 日米宇宙協力：ISS からアルテミスへ（宇宙航空研究開発機構（JAXA）ワシントン駐在員事務所 土屋健太所長代理）

宇宙航空研究開発機構（JAXA）は、宇宙航空分野の基礎研究から開発・利用に至るまで一貫して行う国立研究開発法人です。ワシントン駐在員事務所は、北米地域における代表として、NASA（米国航空宇宙局）・NOAA（国立海洋大気庁）との連絡調整や、米国大統領府・議会・宇宙航空関連企業の動向調査、JAXA の広報普及・産業振興活動を主に行っています。

当事務所の活動範囲には勿論、ボストン・ニューイングランド地域も含まれています。1960 年代、マサチューセッツ工科大学（MIT）がアポロ宇宙船の誘導・航法システム（アポロ誘導コンピューター（AGC））の開発を担い、同地域は宇宙開発の重要拠点となりました。現在は、ハーバード大学や MIT といった研究機関を中心に、AI やロボティクスと宇宙開発を組み合わせたイノベーションのハブとしても注目され、当事務所としても動向を追っています。そのほか、NASA International Space Apps Challenge という国際的なアプリ/IoT ハッカソンの Boston 地区大会において、当事務所は審査員協力も行っています。



2026 年 5 月 31 日に開催されたボストン科学博物館における「Innovation Spotlight: Japan」では、ボストン総領事館による声かけのもと、JAXA の活動紹介を行うブース展示に加え、「US-Japan Collaboration in Space: From ISS to Artemis」という題での講演を行い、「ISS をはじめとする様々な日米宇宙協力の歴史が、今日のアルテミス計画における協力へ繋がっている」ことをお伝えしました。とても印象に残っているのが、多くの子供たちが最後まで講演を聞いてくれて、質問までしてくれたことで、宇宙には万人を惹きつける魅力があるということを改めて認識しました。

今後数年間に控える JAXA の宇宙探査ミッションの例として、火星の衛星フォボスからのサンプル回収を行う「MMX」、月の南極域における水資源調査を行う「LUPEX」、宇宙飛行士が月面で生活しながら移動・探査を行う「有人与圧ローバー」の開発があります。いずれも JAXA がこれまで培った技術を生かしたミッションですが、同時に、NASA をはじめとする国際パートナーとの協力が不可欠なミッションでもあります。ワシントン D.C. から 1 歩外に出ると、JAXA の活動はまだまだ浸透しておらず、広報普及活動を通じた、更なる国際協力に向けた基盤形成の余地があると感じています。当事務所では引き続き、ボストン地域は勿論のこと、全米各地に目を向けた活動を行っていきたいと思います。

□ Building bridges（公衆衛生の視点を通じたイノベーション）

（ハーバード大学 T.H. Chan 公衆衛生大学院：武見国際保健プログラム主任教授 後藤 あや、武見国際保健プログラム 2025-26 年度武見フェロー アミール 偉（いさむ）、2025-26 年度武見フェロー バーンズ デイビッド アトメニー）

1. はじめに

2026 年 5 月 31 日、ハーバード T.H. Chan 公衆衛生大学院の武見国際保健プログラムは、ボストン科学博物館で開催された「Innovation Spotlight: Japan」に参加し、手首に触れて心拍を測定する

「Heartbeats and Health」を出展しました。そこで測定された心拍数について、参加者に、人の健康だけでなく「ワンヘルス（One Health）」の観点からも説明を行いました。40 人を超える方々が私たちのブースを訪れ、参加者は自分の心拍を測定したり、自分の健康に関する新しい概念を探究したりして楽しみました。私たちは、「人々の健康と、動物の健康との間に橋を架ける」というテーマを通じて、若い世代が、イノベーションや学問分野を超えた「健康」のつながりについて、より広い視野で考えるきっかけになるよう、交流を通して働きかけました。

2. 日本と諸外国との橋（学術交流）

武見国際保健プログラムは、過去 40 年以上にわたり、公衆衛生およびグローバルヘルス分野の国際研究における礎としての役割を果たしてきました。1983 年以降、63 か国から 337 名のフェローが本プログラムに参加しています。キャリア中盤のフェローたちは、在籍期間中に自らの独自研究を進展させると同時に、新たな研究分野を切り拓いています。彼らの取り組みはプログラム終了後も続き、研究活動を通じて、国内外の研究機関、研究者、医療・保健の現場にいる専門家、政策関係者、市民との間に橋を架けています。この取り組みは、グローバルで学術的な交流であると同時に、人と人との交流でもあります。

3. 武見フェローと次世代との橋（健康教育）

今回の展示の主要な目的の一つは、若い世代に健康リテラシーの基本を伝えることでした。来場者の中には、若者を含め、初めて自分の心拍を測った人もおり、自分の身体の働きを学ぶ実践的な機会となりました。私たちは、参加者に自分の測定した心拍数を共有してもらうため、正規分布曲線（ベルカーブ）のモデルにシールを貼ってもらいました。そのうえで次世代への健康教育の一環として、人の平均的な心拍数について説明しました。このような自分の健康への気づきは、その情報を友人や家族、コミュニティとの共有により、周囲の人々の意識を高めることにもつながります。

4. 「人・動物・環境」の健康（ワンヘルス（One Health））

合わせて、私たちは、人と象、馬、犬、猫、ウサギ、マウスなど、様々な動物種の心拍数の比較を通じて、ワンヘルスの概念を紹介しました。参加者たちが動物同士の心拍数を比べている中で、ある子どもが興奮気味に「じゃあ、動物の心臓も、私たちと同じように動いているってこと？」と尋ねま

した。この素朴な問いは、好奇心と理解との「架け橋」であり、素晴らしい着眼点です。私たちは、サイズや生理機能に違いはあっても、人と動物は多くの生物学的プロセスを共有しており、生活習慣を通じて、それが互いに結びついていることを説明しました。さらに、動物と人間との間で病気がどのように広がり得るか、そして医師、獣医師、環境科学者、公衆衛生の専門家が、動物と人間の健康を守るために協力する理由について話を進めました。このように、科学と日常的な理解の間に橋を架けることで、来場者が単なる学習者に留まらず、家庭や学校、そしてコミュニティの中で、自らの健康を促進する「担い手」として行動できるという自覚が持てるようになります。少年期からの、この意識の醸成は、「人・動物・環境」の健康を守るうえで、協働、予防、そして共同責任を大切にする世代の育成につながります。

5. おわりに

学術的なプラットフォームは、研究者や専門職を養成するだけにとどまりません。研究者や専門家が、自らの知識を若い世代と共有することで、より広い教育的な「架け橋」を築くことができます。このようにして、公衆衛生教育は「瓦屋根」型の学びのモデル、すなわち一つの世代が次の世代を支え、教えていく形をとることができます。武見国際保健プログラムは、この学びの連鎖を通じて、現在のフェローたちの成長に貢献するだけでなく、公衆衛生およびワンヘルスの視点を次世代へと受け継ぎ、将来の人材の教育と自立・主体性の強化（エンパワメント）への寄与を高めていきます。



左端：武見国際保健プログラムが展示した「Heartbeats and Health」

左から2番目：心拍数の測定結果（シール）が貼られたベルカーブの図と、動物間での心拍数をまとめた表

右から2番目：武見フェロー（獣医）が、ワンヘルスについて説明している様子

右端：別の武見フェロー（元理科教員）が、ワンヘルスについて説明している様子

2. ニューイングランド経済・イノベーション・エコシステム概観

□ なぜボストンか、なぜ今か：共創による三菱電機の DX 推進 (Mitsubishi Electric Research Laboratories (MERL) Anthony Vetro 社長兼 CEO)

2026 年 6 月 4 日、三菱電機はマサチューセッツ州ケンブリッジ市ケンダル・スクエアに「Serendie Street Boston (セレンディストリートボストン)」を開設し、重要な節目を迎えました。今回の開設は、新たなイノベーション拠点の誕生にとどまらず、ソフトウェア、AI、データ活用型サービス、そして共創によるデジタルソリューションへと向かう当社の変革における、より大きな一歩を示すものです。



三菱電機は長年にわたり、世界最高水準のハードウェア、システム、エンジニアリングによって高い評価を得てきました。当社の製品は、ビル、工場、交通ネットワーク、エネルギーインフラ、住宅、都市といった実世界の中で稼働しています。こうしたシステムは、性能の向上、効率化、故障の予知、意思決定の自動化、新たなサービスの創出に活用できる価値あるデータを、さらに多く生み出しています。今後の機会には、三菱電機が培ってきた深いエンジニアリングの蓄積と、現代の複雑なビジネス上・社会上の課題に対応するために必要なデジタルインテリジェンスとを結び付けることにあります。

それこそが、Serendie Street Boston の目的です。

Serendie Street Boston は、ソフトウェア、AI、DX (デジタルトランスフォーメーション) に関する三菱電機の米国拠点です。研究、製品開発、ソフトウェアエンジニアリング、UX、事業創出、そして外部との協働が一つの場に集まるよう設計されています。「Serendie」という名称は、「思いがけない発見」や「偶然がもたらす幸運」を意味する Serendipity (セレンディピティ) と、Digital Engineering (デジタル・エンジニアリング) を掛け合わせたものです。人、技術、データ、そして現実の課題を結び付けることで、思いがけない発見と実用的な成果につなげたいという意図を表しています。

本拠点は、三菱電機がグローバルに展開する共創イニシアティブ「Serendie」の一環であり、「循環型デジタル・エンジニアリング企業」への変革という当社の構想を米国市場にもたらすものです。具体的には、データとデジタル技術を活用して、実際に導入されたシステムから継続的に学び、ソリューションを改善し、お客様と社会に新たな価値を創出することを意味します。Serendie Street Boston は、機会の特定、アイデアの迅速な検証、実環境でのパイロット導入、そして有効性が確認されたものの拡大展開を各チームが実行できるようにすることで、このサイクルを加速させることを目指しています。

東海岸、とりわけグレーターボストン地域を選んだことには、明確な戦略的意図があります。グレーターボストンは、世界で最もイノベーションが集積した地域の一つです。近距離圏内に、有力大学、研究病院、ロボティクス関連組織、AI・ソフトウェア分野のスタートアップ、ベンチャー投資を受けた企業、グローバル企業、そして厚みのある技術人材層が存在しています。より速いスピードで前進しようとする企業にとって、この地域は協働のための類まれな環境を提供しています。

また、ボストンは三菱電機にとって新たな土地ではありません。**Mitsubishi Electric Research Laboratories**（以下、**MERL**）は、30年以上にわたりケンブリッジのイノベーションコミュニティの一員であり続けてきました。**MERL**は、AI、信号処理、制御、最適化、ロボティクス、マルチフィジックスモデリングといった分野において高い研究能力を有しています。この長年にわたる研究基盤は、**Serendie Street Boston**に独自の強みをもたらします。すなわち、最先端の研究に近い場所に拠点を置きながら、アイデアを実装可能なソリューションへと転換することに注力できるという点です。

長期的な研究と近い将来のインパクトとを結ぶこの関係は、本イニシアティブの中核をなすものです。**MERL**は、商用化までに数年を要する技術を探究することも少なくありません。**Serendie Street Boston**は、そうしたアイデアがお客様やパートナー、そして新規事業へと向かう道筋を、より確かなものにします。同時に、本拠点は研究者に対して、実世界のニーズ、運用上の制約、そして新たに生まれつつある市場機会をより明確に示す役割も果たします。このフィードバックループは、研究の優先順位を研ぎ澄まし、イノベーションが意味のある課題に根ざしたものであり続けることを支えます。

タイミングもまた重要です。**AI**は、ほぼすべての産業において求められる水準を変えつつあります。お客様が求めているのは、信頼性と効率性を備えているだけでなく、適応性が高く、知的で、接続され、より広範なデジタルワークフローに容易に統合できるシステムです。これは、エネルギー、製造、ビルシステム、モビリティ、インフラといった三菱電機の中核事業においても、また当社が新たな価値を創出しうる新興領域においても同様です。

グローバルなテクノロジー企業にとって重要な問いは、こうした能力についていかに規模を伴って構築していくかということです。一つの方法は、各事業部門の中で個別にソフトウェアおよび**AI**の専門性を育てることです。これは個々のニーズには対応できる一方で、サイロ化を招くおそれもあります。**Serendie Street Boston**は、これとは異なるモデルを提示します。人材、ツール、手法、パートナーシップを集約し、多様な事業領域を横断して支援できる形をとるというものです。三菱電機の各事業グループが持つ産業分野毎の専門知識と、共通のデジタル基盤とを組み合わせることで、当社はより迅速に動き、技術的に優れ、かつ事業として意味のあるソリューションを構築することができます。

共創は、このアプローチの中心にあります。現在では、イノベーションが単独で生まれることはほとんどありません。切実な課題を定義できるお客様、スピードと新たな視点をもたらすスタートアップ、知の境界を押し広げる研究者、そして自社の技術と市場を理解する社内チーム—その全てが必要とされます。**Serendie Street Boston**は、こうしたコミュニティが一堂に会し、実際に手を動かしながらプロトタイプを作成、検証、改良、そして学習を進められる環境として設計されています。

したがって、**Serendie Street Boston** の開設は、単に三菱電機のケンブリッジにおける拠点を拡大するというものではありません。それは、当社のイノベーションのあり方そのものを広げる取り組みです。デジタル・エンジニアリングとセレンディピティが会う場。先端研究が実用的なソリューションへと結実する場。グローバルな知見が現地の人材とつながる場。そして、三菱電機が次世代の知的なシステムとサービスを形づくることに貢献できる場。**Serendie Street Boston** は、そうした場を生み出すものです。

三菱電機にとって、東海岸およびグレーターボストンは、この新たな章にふさわしい環境です。この地域には、世界水準の人材、優れた研究機関、スタートアップ、パートナー、そして困難な課題の解決に意欲的なお客様が集まっています。**Serendie Street Boston** は、まさにそれを実現するための新たなプラットフォームです。すなわち、米国におけるデジタル成長を支える基盤であり、共創の触媒であり、三菱電機の変革における重要な節目となるものです。

三菱電機がこの新たな歩みを始めるにあたり、在ボストン日本国総領事館の皆様のご支援に心より感謝申し上げます。総領事館からの励ましとご関与は、日本とグレーターボストンのイノベーションコミュニティとの強い結び付きを映し出すものです。今後も、協働、技術、そして共に築く進歩を通じて、この関係に貢献してまいります。



□ 日本の大学エコシステムをボストンへ接続する：NINEJP ボストン拠点の挑戦と共創（広島大学 田原栄俊副学長（スタートアップエコシステム担当）

1. はじめに：世界最高峰のイノベーション集積地「ボストン」への進出

2026 年初頭、JST の全国ネットワーク構築支援事業（NINEJP：National Innovation Network for Entrepreneur Japan）の一環として、広島大学は日本の大学エコシステムを代表する形で、マサチューセッツ州ケンブリッジの「CIC Cambridge」に国際実装拠点（NINEJP ボストン拠点）を新設いたしました。

ボストン・ケンブリッジ地域は、MIT やハーバード大学をはじめとする世界トップクラスの大学群に加え、ケンダル・スクエアに象徴される世界最大級のライフサイエンス・ディープテックのクラスターが徒歩圏内に超高密度で集積するイノベーションの中心地です。この地は、CIC や Venture Café といった共有空間を中心に日常的なセレンディピティが生まれる環境であるだけでなく、教員や学生の起業が日常化し、失敗やピボットを肯定的に捉える風土が浸透しています。さらに、科学者としてのバックグラウンドを持つ投資家がサイエンスを徹底的に精査して投資決定を行う強固な信頼ネットワークが存在することも、日本の優れた技術シーズを接続・社会実装する上で極めて重要な意義を持っています。

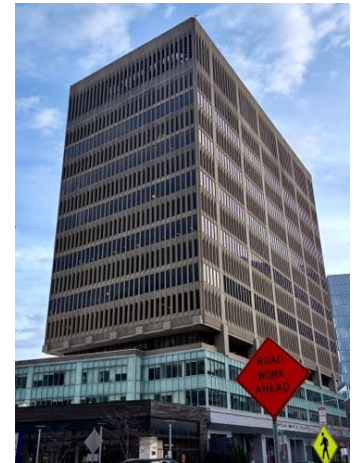


Fig. 1NINEJP ボストン拠点の入る CIC Cambridge ビル (One Broadway)

2. NINEJP ボストン拠点の取り組み：アジャイルに稼働する日米の「架け橋」

NINEJP ボストン拠点（One Broadway 11 階）は、単一大学の出先機関にとどまらず、日本全国の大学や研究機関をつなぐ「日本の大学エコシステム」の現地実行窓口として機能しています。

本拠点は、大学本体の運営負担やリスクを最小限に抑えつつ機動性を確保するため、現地在住の専門性の高いメンバー5 名によるパートタイム協働体制を採用しました。Slack や Zoom などのデジタルツールを駆使し、日本（広島大学スタートアップ推進部門）と現地チームがリアルタイムで情報共有するアジャイルな運営体制を確立しました。これにより、現地の情報や来訪調整の要請に対して迅速に対応できる体制を実現しています。

現在、本拠点では、①現地の VC、製薬企業、大学とのネットワーキング、②日本からの研究者や起業家に対するアジェンダ構築や CIC での案内を含む来訪者支援、③現地で得た接点や情報のタイムリーなデータベース化と日本側へのフィードバックを重点活動としています。

これらの活動の具体的な成果発信の場として、2026 年 9 月 15 日～17 日に、CIC Cambridge にて日本発の創薬・ディープテックスタートアップを選抜・派遣する主催イベント「NINEJP Japan Innovation Hub 2026 in Boston (Cambridge)」を開催いたします。特に最終日の 9 月 17 日には、現地最大規模のコミュニティイベントである「Thursday Gathering」とシームレスに連携し、日本発のスタートアップによるピッチイベントに加え、起業を目指す研究者が自らの研究シーズを現地エコシステムへ直接ア

ピールするポスターセッションを共同で設けます。研究シーズからスタートアップまで、多層的なレイヤーで日本のイノベーションの底力を示す予定です。

3. 今後の展望：広島から世界へ、「平和とイノベーション」の調和

広島大学は現在、地方創生やディープテック創出を加速する「PSI (Peace & Science Innovation) Ecosystem」の構築に注力しています。この PSI が掲げるのは、単なる経済的成功だけでなく、「平和を希求しながら世界の課題を解決する」というビジョンです。

NINEJP ボストン拠点は、この PSI ビジョンをグローバルに社会実装するための最前線の実践の場です。ボストンの「地域と大学が一体となって挑戦を称え合う風土」を日本の地方大学エコシステムへ適切に還元し、同時に日本が誇る高度な科学技術をボストン経由で世界へ届ける。このアジャイルな双方向の国際頭脳循環を体現し続けることで、日米の強固な共同イノベーションの未来を切り拓いてまいります。

□ 世界の誰もが来たくなる大学へ～UTokyo College of Design の創設（東京大学 東京大学 藤井輝夫総長）

<UTokyo College of Design の構想>

東京大学は 2027 年秋におよそ 70 年ぶりの新学部である UTokyo College of Design（以下、UTokyo Design と略す）を開講します。2027 年は東京大学にとって創立 150 周年となる節目であり、全学の基本方針である UTokyo Compass が掲げる 3 つの Core Value「対話から創造へ」「多様性と包摂性」「世界の誰もが来たくなる大学」を体現する新たな教育課程を世界に向けて示そうとするものです。



UTokyo Design の「Design」とはどのようなものか、これはいわゆる意匠あるいは Aesthetic Design のみならず、たとえば社会制度や法律、政策からヘルスケアシステム、教育制度、さらにはビジネスやサービスにいたるまで、社会に求められるあらゆるものに Design が必要である、ということから、広い意味での Design を意味します。いま人類社会は気候変動や生物多様性の損失等の地球規模課題、そして社会の分断や貧困さらには高齢化など、多くの社会課題に直面しています。こうした課題はいずれも単独の専門分野のみで解決することは難しく、その解決のためには異なる分野の専門知識や手法を編み合わせ、それらを実現可能なかたちで具体化する分野横断的かつ統合的な専門性、すなわち「Design」が必要です（図 1）。また、こうした課題解決に取り組むためには、分野横断的な学びに加えて多様な視点、特にグローバルな視点が不可欠です。UTokyo Design は、こうした学びを実現するため、まさに「世界の誰もが来たくなる」学びの場を創るべく構想されました。

具体的には、世界中から学生を集めるために、教育はオール英語で秋入学とします。また、学士・修士一貫の 5 年制で修士の学位が取得できる課程として、この 7 月に文部科学省より特例認定を受けています。1 学年の定員 100 名は、日本国内からと世界から、およそ半数ずつの学生から構成され、初年次は全寮制で、全員が目白台にあるインターナショナルビレッジに住むことになります（図 2）。

<主体的かつ個別最適な学びを創る（図 3）>

入学した学生は、まず 1 年次に Interdisciplinary Foundations (IF)を通して、社会がどのようにできているか、地球や宇宙はどのように理解されているか、法、政治、経済から理学、工学、医学に至るまで、東京大学の多様な学術知に触れます。また Design に関わる方法論を一通り学びます（8 Track Design Series）。これらはいずれも必修です。

2 年次からは、学生それぞれが自らの興味・関心に従って、図中にある Interdisciplinary Perspectives (IP) の 5 つの領域「Environment & Sustainability」「Technology Frontiers & AI」「Governance & Markets」「Healthcare & Well-being」「Culture & Society」から多様な科目を選択して学びます。学生が自分でカリキュラムを創っていくイメージです。自らが手がけたい試みやプロジェ

クトに応じて、様々な知の体系が、それぞれ内発的に積み上がっていくことを期待するものです。この IP の学びに加えて、**Change Maker Design Project** が始まります。学生は通年で、社会課題をテーマにしたいいくつかのプロジェクトに関わりますが、そのいずれもが研究プロジェクトというよりは、産業界や公的機関等と連携して進める未来志向のプロジェクトを想定しています。そこでは個々人がそれぞれの学びを進めることはもちろん、たとえば企業の実務メンバーとも一緒にチームでの作業も経験することになります。

<社会との接点から学ぶ>

Change Maker Design Project は、主として校舎内につくるスタジオ（図 4）を作業場として進めることとなります。多様な人々が出入りし、時には小規模なセミナーをしてもらうなどして、議論することを通して、プロジェクトの構想を磨き上げていきます。2 年次、3 年次の 2 年間にわたり、複数のプロジェクトを手がけることを通して学びを進めます。教室内で学べることは限られていますので、広く社会との接点を持ちながらプロジェクトを進めることが重要です。

5 年制である **UTokyo Design** の特徴として、4 年次には最短でも半年、最長 1 年間のインターンシップを課しています。国内外の提携先企業や国際機関、公的機関等(*1)で長期にわたって働くことを通して、仕事をする、ということの理解を進めるとともに、世界がどのように動いているのか、これを体感することになります。**UTokyo Design** の **Motto** は「**See the World through Design, Then Change It.**」であり、まさに「**See the World**」のため、長期インターンシップを必須にしています。

なぜ社会との接点を増やす必要があるのでしょうか。それは変化の激しい時代にあって、社会には容易には答えの見いだせない問いや課題が多数存在しており、それに直接触れることを通した学びが **UTokyo Design** には不可欠であるからです。また、従来は大学が人を育てて産業界や社会に渡し、その人材が企業や公的機関に雇用される、というように人材育成と雇用とのあいだに明確な線引きがなされてきました。これに対して近年では、特に日本においては少子化が進むなかで、大学と社会とが一緒になって人材を育てていく、そうした考え方の重要性が高まってきていると言えます。たとえば経団連の「博士人材に関する産学協議会合」では、国公私大学の代表と経団連幹部のあいだで、博士人材の育成・活躍について 2 年間に渡り議論し、2026 年 2 月に報告書(*2)を取りまとめましたが、そこでも「(*2 より引用) 人材育成は、大学だけでも、企業だけでも完結しない。大学と企業が協働し、学びと実践を行き来できる環境をつくることが、社会全体の知の基盤を強化し、産業や地域の持続的な成長につながる。」としています。

<むすびに>

以上のような問題意識から **UTokyo Design** では、学びの場自体を外部に開いてオープンな環境を創り、学生が社会の実践に触れる機会をより多く持てるようにしたいと考えています。世界から集まる学生たちと日本から入ってくる学生たちからなる国際的な環境、そして社会との接点をより広く、ま

た実際に企業や公的機関の実務にも触れる豊富な機会を得ることによって、多様な視点とそして実践につながるような **Design** の学びを実現したいと考えています。

現在、世界の様々な高等教育機関において、こうした分野横断型の学びを実現しようとする試みが進んでいます。米国でよく知られている例としては、ニューヨークの **Cornell Tech** (*3) や MIT に設立された **Schwarzman College of Computing** (*4)、さらには UC Berkeley の **College of Computing, Data Science and Society**(*5)などが挙げられます。UTokyo Design もまた、東京大学がまさに「世界の誰もが来たくなる大学」となるべく、高等教育における新しいアプローチとして、東京に国際的な学びの場を創るものです。米国東海岸はもちろんですが、世界の多くの学生が目指す場となるよう、不断に努力を続けて参ります。

Footnotes:

*1 <https://design.adm.u-tokyo.ac.jp/ip/program/off-campus-experience/organizations/>

*2 <https://www.keidanren.or.jp/policy/2026/004.html>

*3 <https://tech.cornell.edu>

*4 <https://computing.mit.edu>

*5 <https://cdss.berkeley.edu>

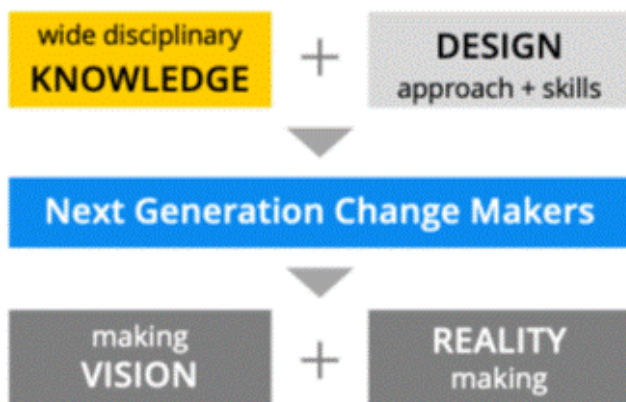


図1 UTokyo Design における「デザイン」～デザインの境界を押し広げる



図2 目白台インターナショナルビレッジ

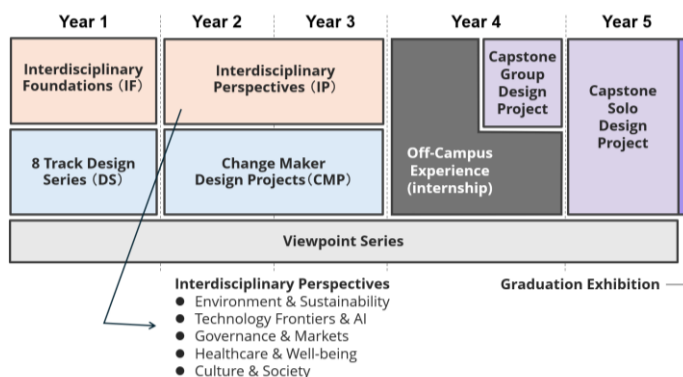
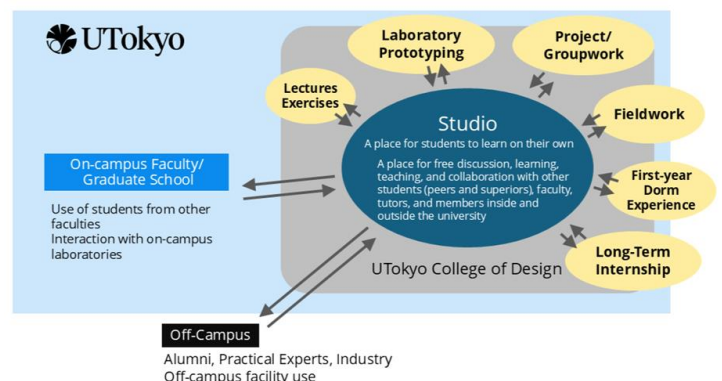


図3 カリキュラムの全体像



15. 図4 スタジオでの多様な学び～社会との接点から学ぶ

□ ENSEMBLExJ ～世界のイノベーションを日本の患者さんへ～（国立がん研究センター）

世界のイノベーションを日本の患者さんへ

世界各地のバイオテクノロジー企業、大学発スタートアップ、研究機関から、革新的な治療法が次々と生み出されています。日本の患者さんがこうした進歩の恩恵を受けるためには、日本が単なる将来の市場としてではなく、グローバル臨床開発のパートナーとして、開発の早期段階から検討されることが重要です。

ENSEMBLExJ は、「Empowered National Synergy for Medical Biotech Landscape Expansion across Japan」の略称であり、日本の厚生労働省の支援を受けて実施されているナショナルプロジェクトです。日本の 6 つの国立高度専門医療研究センターが緊密に連携し、幅広い疾患領域において、海外のイノベーターを支援しています。

本プラットフォームの使命は、海外で開発された有望な医薬品や先進的な治療技術について、日本における臨床開発に向けた適切な道筋を構築するとともに、グローバルな医薬品開発に対する日本の貢献を強化することです。

日本の開発エコシステムへのゲートウェイ

日本には、高度な医療制度、豊富な経験を有する研究者・治験責任医師、専門性の高い医療機関、そして優れた臨床研究基盤があります。一方で、日本に拠点を持たない企業にとって、グローバル開発計画の中に日本をいつ、どのように組み込むべきかを判断することは、必ずしも容易ではありません。

ENSEMBLExJ では、各企業との対話を通じて、その技術、開発上の優先事項、日本における具体的なニーズを把握します。その上で、臨床、薬事、開発実務、パートナーシップなどの専門知識を活用し、それぞれの企業に合わせた支援内容と実践的な提案を策定します。

画一的な支援モデルを当てはめるのではなく、各企業にとって最も適切な次のステップを明確にすることを重視しています。具体的には、臨床開発戦略の精緻化、国際共同治験の実施可能性の評価、候補となる研究者や治験実施施設の特定、薬事・製造上の課題の検討、適切な開発・事業パートナーとの連携などを支援します。

多様な専門性が奏でる「アンサンブル」

「ENSEMBLExJ」という名称には、革新的な治療法の開発を成功させるためには、多様な専門性が一体となって取り組む必要があるという考えが込められています。

革新的な治療法を患者さんに届けるために必要なのは、優れた科学だけではありません。アンメット・メディカルニーズや患者ニーズとの適合性、臨床的知見、市場分析、薬事戦略、治験実務、製造・品質に関する専門性、事業開発、資金調達、そして患者アクセスを見据えた長期的な計画も不可欠です。

ENSEMBLExJ は、こうした開発エコシステムを構成する専門家やパートナー組織と緊密に連携しています。企業を、関連する専門家、医療機関、医薬品開発業務受託機関（CRO）、医薬品開発製造受託機関（CDMO）、製薬企業、その他のステークホルダーとつなぐことにより、個々の製品、疾患領域、開発段階に応じた多面的な支援を提供します。

また、ENSEMBLExJ は、PMDA ワシントン D.C.事務所を含む独立行政法人医薬品医療機器総合機構（PMDA）とも緊密に連携しています。この連携を通じて、薬事的な視点を支援内容や提案に反映することができます。海外企業にとって障壁と受け止められがちな日本の薬事上の論点を整理し、日本における開発計画を強化するための実践的な機会へと転換することを目指しています。

本プラットフォームは、既存の商取引関係や契約関係に代わるものではありません。企業が必要な専門性を見極め、適切な関係者とのつながりを構築し、日本に関するより十分な情報に基づいた戦略を策定できるよう、既存の関係を補完する役割を担います。

ボストンのライフサイエンス・コミュニティとの連携

2026 年 6 月、ENSEMBLExJ は CIC Boston において、本プラットフォームの紹介と、日本におけるグローバル医薬品開発の可能性について議論するイベントを開催しました。

ボストンおよびケンブリッジは、バイオテクノロジー企業、製薬企業、学術機関、投資家、起業家が集積する、世界有数のライフサイエンス拠点です。このエコシステムから生まれる多くのイノベーションは、当初からグローバルな開発を視野に入れて設計されています。

PMDA ワシントン D.C.事務所との共催で実施された本イベントでは、ENSEMBLExJ が提供する支援に加え、日本の薬事環境に関する主要なポイントを紹介しました。日本の臨床開発環境、国際共同治験の機会、専門医療機関との連携、グローバル開発プログラムに日本を組み込む際の留意点などについて議論が行われました。

本イベントを通じて、日本は将来の商業市場としてだけでなく、戦略的な開発パートナーとしても重要な役割を果たし得ることが示されました。経験豊富な研究者・治験責任医師、専門性の高い医療機関、充実した臨床研究基盤を有する日本は、国際的な開発プログラムに大きく貢献することができます。

患者さんと事業展開のための架け橋

ENSEMBLExJ は、世界のイノベーターと、日本の医療・開発エコシステムとの間に、実践的なつながりを構築します。

海外企業が日本の環境を理解し、適切なパートナーを見だし、グローバル開発計画の早期段階から日本を検討できるよう支援することで、有望な治療法を日本の患者さんに届けることを目指しています。

ボストンをはじめとするイノベーション拠点との継続的な交流と、日本国内の臨床開発エコシステムとの連携を通じて、ENSEMBLExJ は今後も国境を越えて、企業、研究者、医療機関、開発パートナーを結びつけていきます。

その最終的な目標は明確です。世界で生み出された革新的な治療法を日本の患者さんに届けるとともに、次世代の医薬品開発に日本が貢献できるようにすることです。

ご関心をお持ちの方は、いつでもお気軽にお問い合わせください。

Web page : <https://ensemblexj.jp>

Email : ensemblexj@ml.res.ncc.go.jp



□ 出会いを問いに、イノベーションを価値に：ボストンと日本の往復から考える社会科学と循環の役割（ハーバード・ビジネス・スクール 天野友道 准教授（経営学））

私が学部生としてボストンに来てから、ほぼ二十年になる。学生時代には、友人と語り合う時間と、一人で静かに考える時間との両方があった。立場を変えて研究者となった現在も、セミナーや教室、企業との対話から得た問いや気づきを持ち帰って考え、文章やモデルとして形にし、再び対話の場へ持ち出すという営みを続けている。私にとって、ボストンを核とするニューイングランドの魅力は、新しい知見や多様な人々に接することだけではない。そうした出会いから一步距離を置いて静かに考え、そこから生まれた問いを、もう一度他者との対話へ戻す。このような往復を許す懐の広さにこそ、その魅力があるのだと思う。



このような対話と内省の往復は、私が研究してきたイノベーションの普及の問題とも重なる。イノベーションの価値は、発明された瞬間に実現するわけではない。新しい技術や発想が人々に知られ、採用され、組織の日々の仕事に実装され、継続的に使われて初めて、その可能性が社会的・経済的な価値として実現する。出会いも、それだけでは意味のある関係には育たないのと同様に、イノベーションも、生み出されただけではその価値を実現しない。

私自身、経済学とマーケティングの立場から、「なぜ同じものが、ある人や組織には受け入れられ、別の場所では根づかないのか」という問いと向き合ってきた。たとえば、小売店舗を対象に行ってきた研究では、同じ新商品であっても、どの店舗に最初に導入されるか、また、それをどの管理職が担うかによって、その後の広がり方が異なることを見てきた。商品そのものが同程度の魅力を備えていても、それを扱う現場のマネジメントや消費者との関わり方によって、その後の成否は大きく左右され得る。こうした問いは、より省エネルギー性能の高い製品の普及を制度がどのように左右するのか、あるいはゲームの設計が人々の利用や継続をどのように変えるのか、といった私のほかの研究にも共通している。

発明と価値の間にあるこの過程を明らかにするところに、社会科学が果たせる一つの役割がある。ボストンには、イノベーションの源となる発明を生み出す人々だけでなく、技術や商品が社会の中で実際に働き、価値を生むための条件そのものに向き合う人々もいる。日本とボストンとの循環が強化されていく姿を考えると、よりイノベーションの価値実現の過程そのものをも見つめる姿へと昇華されるような双方向の循環にこそ、両者がつながる本当の価値があるのだろう。

日本とニューイングランドの間には、すでに企業や研究者、学生、支援機関を結ぶ豊かな往来がある。重要なのは、接続の数を増やすことだけではなく、接続から生まれた問いを、その後の試行と価

値の実現へつなげることであろう。交流を「何を見るか」だけで終わらせず、そこから何を問いとして持ち帰るのか、導入や実装を阻むものは何か、何を小さく試し、そこで得た学びをどのように次の対話へ返すのかまで考える。ボストンで得たアイデアを日本で試すだけでなく、日本の現場から得た問いをボストンへ戻す。問いと学びを次の試行へつなぐことができれば、名刺交換や成功事例についての意見交換、刺激を得るための交流も、一度限りで終わらず、継続的な価値創造の過程へと変わっていく。

こうした捉え方の背景には、在ボストン日本国総領事館をはじめ、ボストンと日本の双方でこの往来を育んできた人々や機関の力強い支えがある。J-NEXUS が、成果や活動を紹介するだけでなく、出会いから生まれた問いや、そこから始まった試行を再び持ち寄る場として機能を強めていくことを期待したい。日本とボストンの間で試してみたい問いや、まだ答えのない課題があるなら、それをこの循環の中に持ち込むところから始めてみてはどうだろうか。私自身も、こうした問いを企業や研究者の方々と一緒に考え、実際の現場で小さく試していく機会を今後も増やしていきたいと、思いを新たにしている。

□ Building a Two-Way Innovation Bridge Between Japan and the United States (Alumni Ventures)

日本は長年にわたり、世界水準の科学、工学、そして技術革新の源泉であり続けてきました。日本の大学や研究機関は世界的に重要な発見を生み出し、主要企業は高度な技術力とグローバルな事業展開力を有しています。しかし、こうした強みを国際的に規模を拡大しうるベンチャー投資先企業へと転換するためには、グローバルな資金、顧客、人材、そして事業化ネットワークとのより強固なつながりが必要とされてきました。

Alumni Ventures は、こうしたつながりの強化を目的として、2026 年に「Japan + US Bridge Fund」を立ち上げました。本ファンドは、日本と米国のイノベーション・エコシステムをつなぐ、持続的かつ双方向の道筋を築くことを目指し、「日本から世界へ」と「世界から日本へ」の双方向に機能することを意識して設計されています。

日本から世界へ：「Go Global」

Alumni Ventures は、優れた技術的・科学的基盤を持つ有望な日本企業を発掘・投資し、米国およびグローバルの投資家、顧客、人材、戦略的パートナーとの接続し、世界に伍する日本スタートアップの創出を支援します。これは、ライフサイエンス、AI、量子コンピューティングをはじめとするディープテック領域など、日本が確かな研究力と産業基盤を有する分野において、特に意義のある取り組みです。

米国から日本へ：「Go Japan」

同時に Alumni Ventures は、米国における幅広いベンチャーネットワークを活用し、アジアおよび日本市場への参入に関心を持つ企業を見出すことができます。その狙いは、単に資金を提供することではなく、最初の顧客、事業化パートナー、ローカライゼーション支援、そして長期的な戦略的関係といった、現地で成功するために必要な要素を見つけ出す手助けをすることにあります。

このアプローチの根底にあるのは、「最良の架け橋は一方通行ではない」というシンプルな信念です。

「Japan + US Bridge Fund」は 2026 年 3 月にファーストクローズを迎え、KDDI、および東京大学のイノベーション・事業化プラットフォームである UTokyo IPC が、設立時のパートナーとして名を連ねています。これらの関係は、投資資金の提供にとどまらず、起業家や研究者を、企業、投資家、そしてイノベーション・エコシステムの様々な担い手と結び付けることを目指すものです。

本ファンドは、すでにこの戦略の実践に着手しています。2026 年 6 月、Alumni Ventures は、中性原子方式のハードウェアを開発する東京拠点の量子コンピューティング企業 Yaquumo へ、日本国内で初となる投資を実施しました。2026 年 7 月には、2025 年ノーベル生理学・医学賞を受賞した坂口志文博士による画期的な科学的成果の事業化に取り組む RegCell へ、2 件目の投資を行いました。また

Alumni Ventures は、日本における恒久的な拠点として東京オフィスを設立しており、長期的に日本のエコシステムに貢献していくことを目指しています。

こうした取り組みは、J-NEXUS およびニューイングランドのエコシステムにとっても特に意義のあるものです。ボストンとその周辺地域は、ライフサイエンス、AI、量子技術、先端エンジニアリング、そして大学研究において卓越した強みを併せ持っています。日本は、これを補完する科学的・産業的な能力を有しています。双方の研究者、創業者、企業、投資家の間により直接的なつながりを生み出すことは、有望な技術が研究室から企業へ、そして企業からグローバル市場へと、より速く進んでいくことを後押しします。

Alumni Ventures は、J-NEXUS コミュニティと連携し、有望な日本のスタートアップや研究主導型企業を発掘すること、米国の技術を日本国内の潜在的なパートナーと結び付けること、そして起業家、大学、企業、投資家が太平洋を越えて協働する機会をさらに創出することを楽しみにしています。

日米をつなぐ Alumni Ventures の取り組みの詳細については、Alumni Ventures Japan 株式会社 日本代表の Ryan Nakata (ryan.nakata@av.vc) までお問い合わせください。



3. 研究開発・イノベーション動向

□ Yale の日本人生命科学研究者をつなぐ Y-JLS Forum (Neurology, Yale School of Medicine 住田智一)

Y-JLS Forum (Yale Japanese Life Science Forum) は、Yale 大学および New Haven 周辺で生命科学・医学研究に携わる日本人研究者や学生を中心としたコミュニティです。「Yale で研究するメンバーの親睦を深め、研究生活を充実させる」ことを目的に活動しており、現在 Facebook グループには約 60 名が参加しています。

Yale には、免疫学、神経科学、がん研究、遺伝学、計算生物学など、さまざまな分野で活躍する日本人研究者がいます。一方で、研究室や Department が異なれば、同じ大学にいても日常的に顔を合わせる機会は意外と多くありません。また、大学院生、ポスドク、医師、教員などキャリアステージもさまざまです。そこで、所属や専門、世代を越えて気軽に話ができる場を作ろうというのが、この Forum の出発点です。

活動の中心となっているのが、定期的に行っている研究交流会です。毎回、Yale で研究するメンバーの一人に自身の研究を紹介してもらい、その後は食事や飲み物を囲んで自由にディスカッションを行っています。完成した研究成果を発表する正式なセミナーというよりも、現在進行中の研究や、これから論文としてまとめようとしている仕事についても率直に話し合える場を目指しています。

2026 年 7 月には、第 10 回となる交流会を開催しました。Yale School of Medicine, Department of Neurosurgery の推名健太郎氏から、computational analysis と microscopy-based screening を組み合わせて明らかになってきた、extrachromosomal DNA (ecDNA : 染色体外 DNA) のがん生物学について紹介いただきました。論文発表前の新しい研究内容も含めて共有いただき、異なる研究分野の参加者からさまざまな質問や意見が出る活発な会となりました。

この Forum の良さは、研究の話だけで終わらないところにもあります。実験手法や研究環境についての情報交換はもちろん、研究者としてのキャリア、日本と米国での研究環境の違い、New Haven での生活などについても自然に情報を共有しています。特に、Yale に来たばかりの研究者にとって、少し先を歩いている日本人研究者と気軽に話せることは、研究面でも生活面でも役に立つことが多いと思います。

また、近年は Yale の外との交流にも少しずつ活動が広がっています。日本から Yale を訪問する学生や子どもたちとの交流に協力することもその一つです。2026 年夏には、全国統一小学生テストの成績上位者からなる Ivy League 視察団が Yale を訪問する機会に、日本人研究者が研究や海外での生活について紹介し、子どもたちとの質疑応答を行いました。研究者が自分たちの経験を次の世代に伝えることも、このようなネットワークだからこそできる

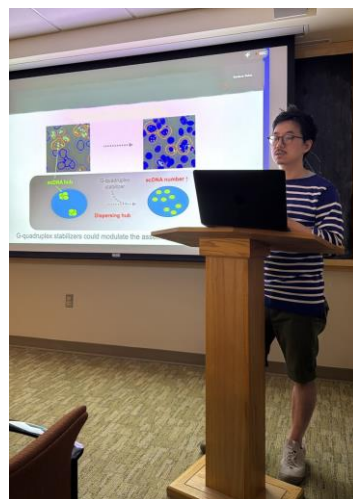


写真 1 : 研究発表会の様子、
推名健太郎氏

活動の一つだと思っています。

海外で研究をしていると、研究そのものだけでなく、人とのつながりに助けられる場面が数多くあります。研究分野やキャリアステージを越えて気軽につながり、新しく **Yale** に来た人も自然に加われる。**Y-JLS Forum** を、そんな緩やかで息の長いコミュニティとして育てていければと考えています。そして、このネットワークから新しい共同研究や交流が生まれ、日本と **Yale** をつなぐ一つの小さな架け橋になれば嬉しく思います。



写真 2：研究発表会参加者の様子

4. その他・イベント紹介

□ ニューイングランドの日本人科学技術研究者情報 (PI リスト)

近年、科学技術の重要性は一層高まっており、経済成長はもちろん、国家安全保障に至るまで、国民生活を支える重要な基盤となっています。我が国政府では、科学技術外交を戦略的に推進し、海外で活躍する日本人研究者を重要な人的資産と位置付け、研究者コミュニティとの連携強化や人的ネットワークの構築に取り組んでいます。

ボストンをはじめニューイングランド地域は、ライフサイエンス、バイオテクノロジー、AI、量子、エネルギーなどの分野で世界有数の研究拠点が集積し、多くの日本人研究者が第一線で活躍しています。

在ボストン日本国総領事館では、研究者同士や日本本国との連携を強化することが、日米協力の深化、ひいては日本の国力強化につながると考えており、このたび、ニューイングランドで活躍する日本人 PI (Principal Investigator: 大学等における研究主宰・責任者) 情報をリスト化し、2026 年 2 月に公表しました。ニューイングランド日本人 PI リストは在ボストン日本国総領事館 Web ページに掲載をご覧ください。

本リストは、日本の関係省庁や大学等に共有し、海外に挑戦したい若者や国際共同研究を模索する日本の大学に活用頂くことなどを通じ、我が国の科学技術力の基盤の強化に繋げることを目指しています。

また、登録された PI には、日本との繋がりを強めることによる優秀な人材確保ポテンシャルの向上及びそれに伴う所属機関での日本人プレゼンスの向上が期待されるほか、当館からも日本関連の交流機会の提供などを行っていきたいと思っています。

●登録されている研究者 (PI) への連絡について

各研究者への連絡先は、PI リスト右欄に記載の URL をご確認ください。本 PI リストを経由して掲載されている PI に連絡を取る際は、メール件名に【PI リスト】と明記頂くようお願いいたします。

また、本リストを通じて留学の受入先や国際共同研究などが生まれた場合には、是非こちらまでお知らせください。本取組みの継続と拡大には皆様の賛同の声と本リストを活用した具体事例の蓄積が欠かせません。何卒皆様のご協力をお願いいたします。

●追加登録を希望されるニューイングランド在住の PI の方へ

ニューイングランド地域に在住し、大学・研究機関等で研究主宰者 (PI) として活動されている日本人研究者の方で、本リストへの掲載を希望される場合は、以下宛先までご連絡ください。

在ボストン総領事館 経済・科学技術班メールアドレス

business@bz.mofa.go.jp

□今後のイベント紹介

9月10日（木）：University of Tsukuba Night（主催：筑波大学、会場：CIC ケンブリッジ）

9月17日（木）：NINEJP Japan Innovation Hub 2026 in Boston (Cambridge)（主催：NINEJP、会場：CIC Cambridge）

9月22日（火）～23日（水）：MIT Energy Research Conference（主催：MIT Energy Initiative）
<https://energy.mit.edu/>

9月22日（火）～23日（水）：World Medical Innovation Forum (WMIF)（主催：Mass General Brigham、会場：Westin Boston Seaport District）
<https://worldmedicalinnovation.org/>

9月22日（火）～25日（金）：Biotech Week Boston（会場：Hynes Convention Center）

9月24日（木）～25日（金）：Boston Human Spaceflight Symposium（主催：MGB SPEAR MED、会場：MGH、MIT）
<https://bostonspaceflight.org/>

10月18日（日）～21日（水）：The MedTech Conference（主催：AdvaMed、会場：Boston Convention and Exhibition Center）
<https://medtechconf.com/event/the-medtech-conference-2026/>

10月26日（月）～30日（金）：Tough Tech Week（主催：The Engine、会場：ボストン・ケンブリッジ）
<https://engine.xyz/toughtechweek>

10月29日（木）～30日（金）：The Dartmouth Conference, Revisited（AI 誕生70周年記念）（主催：ダートマス大学、会場：Hanover, NH）
<https://ai.dartmouth.edu/70th-anniversary>

11月（日程未定）：MIT Research and Development Conference（主催：MIT ILP、会場：Boston Marriott Cambridge）